

HP Performance Agent

Windows® オペレーティング システム

ソフトウェア バージョン : 4.70

インストール、設定ガイド

Manufacturing Part Number: B7491-99089

本書の発行日 : 2007 年 9 月

ソフトウェアのリリース日 : 2007 年 9 月



ご注意

保証書

HP 製品およびサービスに対する保証は、それらの製品およびサービスに付属している保証規定に明記された条項に限られます。本書に記載された内容は、追加の保証を規定するものではありません。HP は、本書の技術的および編集上の誤りや不備について、その責任を負わないものとします。

この情報は予告なしに変更されることがあります。

権利の制限

本書で取り扱っているコンピュータ ソフトウェアは秘密情報であり、その保有、使用、または複製には、HP から使用許諾を得る必要があります。FAR 12.211 および 12.212 に従って、商業用コンピュータ ソフトウェア、コンピュータ ソフトウェア ドキュメンテーション、および商業用製品の技術データは、ベンダ標準の商業用ライセンスのもとで、米国政府にライセンスが付与されます。

著作権

© Copyright 1983-2007 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標

UNIX® は、The Open Group の登録商標です。

Adobe® および Acrobat® は Adobe Systems Incorporated の商標です。

Windows® および MS Windows® は米国における Microsoft Corporation の登録商標です。

Microsoft® は米国における Microsoft Corporation の登録商標です。

その他の製品名は各社の商標またはサービス マークです。

サポートについて

次の HP ソフトウェア サポート専用 Web サイトを参照することができます。

<http://www.hp.com/go/hpsoftwaresupport>

HP ソフトウェア オンライン サポートでは、対話型テクニカル サポート ツールをすぐにご利用いただけます。このサポート サイトでは、次の機能が用意されています。

- 技術情報の検索
- サポート ケースの登録とトラッキング、およびエンハンスメント要求の送信とトラッキング
- ソフトウェア パッチのダウンロード
- サポート 契約の管理
- HP サポート連絡先の検索
- 利用可能なサービスの参照
- ユーザー同士のディスカッション
- ソフトウェア トレーニングの検索と登録

ほとんどのサポート エリアでは、アクセスするために HP Passport ユーザーとして登録、サインインする必要があります。また、多くのサポート エリアでサポート契約が必要です。

アクセス レベルに関する詳細は以下を参照してください。

http://h20230.www2.hp.com/new_access_levels.jsp

HP Passport ID の登録は以下で行うことができます。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html>

目次

1 HP Performance Agent のインストールまたはアップグレード	9
はじめに	9
インストール要件	11
ハードウェア	11
対応しているアーキテクチャおよびオペレーティング システム	12
通信プロトコル	13
ディスク スペース	13
ネットワークに関する考慮点	15
ターミナル サービスを使用した Performance Agent のインストール	16
コントロール パネルからの Performance Agent のインストール	16
コマンド プロンプトからの Performance Agent のインストール	16
インストールまたはアップグレードの手順	18
Performance Agent の終了	18
Performance Agent のインストール	18
手動インストール	19
自動インストール	20
インストール結果	21
ディレクトリ構造	21
Operations Manager を使用する Performance Agent のインストール	22
仮想マシン上の Performance Agent	23
Performance Agent の削除	24
手動アンインストール	24
自動アンインストール	24
すべての Performance Agent ファイルの削除	25
アンインストールの結果	25

2 HP Performance Agent の実行方法	27
はじめに	27
セキュリティに関する制限	28
Performance Agent サービスの起動と終了	29
Windows GUI からの起動と終了	29
コマンド プロンプトからの起動と終了	29
Performance Agent サービスの状態の確認	30
システム再起動時の自動起動	30
Performance Agent の再起動	30
Performance Agent サービスのリフレッシュ	31
Performance Agent 用の通信モードの設定	33
ステータスの確認方法	33
ディレクトリのサンプル	34
ファイアウォールを介した通信	35
HTTP 環境での通信	36
複数の IP アドレスを持つシステムの設定	41
RPC 環境での通信	42
ファイアウォールの設定に関する表	43
安全な通信の設定	45
証明書の使用	45
クライアント認証の使用	45
authip ファイルによる認証の有効化	46
データ ソースの設定	49
Performance Manager 3.x および Reporter のデータ ソースの設定	49
設定オプション	50
データ収集のカスタマイズ	51
アラームの定義	52
コマンド プロンプトからの Performance Agent サービスの制御	52
バックアップに関する考慮点	53
自動バックアップ	54
ドキュメントの表示と印刷	55
Web 上でのドキュメントの参照	56
Adobe Acrobat ファイル	56

3 coda の設定	57
はじめに.....	57
coda 名前空間.....	57
coda 通信名前空間 (coda.comm).....	60
通信ブローカー名前空間 (bbc.cb).....	64
通信ブローカー ポート名前空間 (bbc.cb.ports).....	65
HTTP 名前空間 (bbc.http).....	67
索引	69

1 HP Performance Agent のインストール またはアップグレード

はじめに

HP Performance Agent ソフトウェアは、Microsoft Windows を実行しているシステムからパフォーマンス、リソース、およびトランザクション データを取り込みます (Windows プラットフォームのサポートに関する詳細は、12 ページの「対応しているアーキテクチャおよびオペレーティング システム」を参照してください)。また、最小限のシステム リソースを使用して、システム上の現在および過去のデータに関するアラーム状態の連続的な収集、記録、要約、タイム スタンプ作成、および検出を行います。さらに、Performance Agent は、アプリケーション応答測定 (ARM: Application Response Measurement) API 標準を使用して、ARM が装備されたビジネス アプリケーションのエンドツーエンドの応答時間を記録できます。

Performance Agent は、VMware ESX Server コンソール 2.5.2 以降および 3.0.x にホストする仮想マシンの監視に対応しています。詳細は、「仮想マシン上の Performance Agent」を参照してください。



本書で使用する用語が表す内容は以下のとおりです。

- Performance Agent for Windows は、Windows 対応の MeasureWare Agent (MWA) を指します。
- 本書における HP Performance Manager は、バージョン 4.0 以降を指します。Performance Manager 3.x という名称は、以前 PerfView と呼ばれていた製品を指します。
- HP Operations Manager という用語は、IT/Operations を指します。

ただし、操作に関するプロセス名およびソフトウェア コンポーネントについては、MeasureWare Agent (MWA) という名前が使用されています。

Performance Agent には、拡張収集ビルダ (Extended Collection Builder) およびマネージャが含まれており、Windows レジストリ パフォーマンス カウンタへのアクセスが可能です。拡張収集ビルダおよびマネージャを使用することで、Windows レジストリを介して利用可能なデータが収集 / 記録されます。

収集したデータは、表計算ソフトや、Performance Manager などの当社の分析ソフト、または他社の分析ソフトを使用して解析できます。さらに、Performance Agent は Performance Manager、HP Network Node Manager、および HP Operations Manager へのデータ アクセスを提供します。

Performance Agent は、データ ソース統合 (DSI: Data Source Integration) 技術を使用して、アプリケーション、データベース、ネットワーク、その他のオペレーティング システムなどの外部データ ソースからデータを受信し、アラーム状態を検出し、ログを記録します。Performance Agent が記録、保存したデータを使用して、次のことが可能になります。

- 環境の作業負荷の特徴づけ
- リソースの使用量と負荷バランスの分析
- 過去のデータの傾向分析とボトルネックの分離および特定
- トランザクション応答時間に基づいたサービス レベルの管理
- 容量計画の促進
- アラーム状態への応答
- システム管理問題の事前の解決



システムにこのソフトウェアがあらかじめインストールされている場合は、第 2 章、「HP Performance Agent の実行方法」に進んでください。

インストール要件

Performance Agent をインストールする前に、システムがこの項に記されている要件を満たしていることを確認してください。Performance Agent がシステム上で正しく動作するためには、システムや構成に関して次の前提条件が必要です。

ハードウェア

Performance Agent は、以下の要件のいずれかを満たす Microsoft Windows システムで実行されます。

- Intel Pentium プロセッサ、または同等のプロセッサ
- Intel Itanium2
- AMD Opteron
- Intel EM64T に対応した Pentium プロセッサ
- Intel EM64T に対応した Xeon プロセッサ

対応しているアーキテクチャおよびオペレーティング システム

表 1 対応しているアーキテクチャおよびオペレーティング システムのバージョン

アーキテクチャ	オペレーティング システム	プロトコル
X86	<ul style="list-style-type: none">Windows 2003 Standard Edition、Windows 2003 Enterprise Edition、Windows 2003 Datacenter Edition、Windows 2003 Web Edition、Windows 2003 R2 Enterprise EditionWindows Vista Enterprise Edition、Windows Vista Business EditionWindows XP Standard (Service Pack 1 またはそれ以降)	HTTP(S)、RPC
X86_64、AMD 64、EM64T	<ul style="list-style-type: none">Windows 2003 Server x64 EditionsWindows XP Professional x64 EditionWindows Vista Enterprise Edition	HTTP(S)、RPC
IPF	Windows 2003 Server for Itanium-based Systems	RPC

Performance Agent に関するネットワーク ソフトウェアの要件についての情報は、15 ページの「ネットワークに関する考慮点」を参照してください。



Performance Agent を Vista/64 ビット プラットフォームに初めてインストールする場合、**[msconfig]** → **[ツール]** → **[UAC の無効化]** をクリックしてユーザー アクセス制御 (UAC) を無効にすることをお勧めします。

通信プロトコル

Performance Agent は、以下の通信プロトコルをサポートしています。

- HTTP(S) 1.1
- RPC



- Performance Agent は、Microsoft Windows 64 ビット プラットフォームでの HTTP および RPC データ通信に対応しています。



HP Operations Agent、HP Operations Manager UNIX Management Server、HP Performance Manager、HP Performance Insight、および OV Internet Services などの HP ソフトウェア製品がインストールされているシステムでは、Performance Agent 4.70 のインストール後に、これらのソフトウェアを再起動することをお勧めします。



- 1 新しいハードウェアを追加する、または設定を変更する場合は、scopent を停止し、後で再起動して変更内容を有効にすることをお勧めします。
- 2 すべてのデフォルトの OS デーモンおよびサービスが有効で実行されている必要があります。

ディスクスペース

Performance Agent はプログラム ファイル、コントロールパネル アプレット、データ ファイル、ログ ファイル、および一時ファイルにディスクスペースを使用します。

Performance Agent アプリケーション用には、指定したドライブに 50 MB 以上の空き容量が必要です。Performance Agent ログ ファイル用には、指定したドライブに 60 MB 以上の空き容量が必要です。

- プログラム ファイル: Performance Agent では、インストール ディレクトリに保存されているプログラム ファイルのインストール用に、約 10 MB のディスク容量が必要です。インストール中に、さらに追加の容量が必要になる場合があります (後述の「一時ファイル」参照)。

- コントロール パネル アプレット : Performance Agent のサービス プログラム および各種の DLL 用に、<\$windir\$\system32 ディレクトリに 2.5 MB の ディスク容量が必要です。



<インストール ディレクトリ>は、Performance Agent をインストールするディレクトリです。Performance Agent に関連するすべてのバイナリおよび共有ライブラリは、それぞれ<インストール ディレクトリ>\bin および<インストール ディレクトリ>\lib に格納されています。<インストール ディレクトリ>へのデフォルトのパスは、<ドライブ>:\Program Files\HP\HP BTO Software です。<データ ディレクトリ>はデータ ファイルを保存するデフォルトのディレクトリです。<データ ディレクトリ>へのデフォルトのパスは、<ドライブ>:\Documents and Settings\All Users\Application Data\HP\HP BTO Software\Data です。



すでに HP ソフトウェア製品がインストールされている場合、Performance Agent は同じディレクトリにインストールされます。

- 設定ファイル、ステータス ファイル、ログ ファイル : デフォルトでは、設定ファイル、ステータス ファイル、およびログ ファイルはプログラム ファイルとは別個に保存されます。ステータス ファイルおよび設定ファイルは、<データ ディレクトリ> ディレクトリに保存され、インストールには約 1 MB のディスク容量を必要とします。ステータス ファイルにはデータが蓄積するため、このファイルのサイズは 10 MB まで増加します。

ログ ファイルは、<データ ディレクトリ>\datafiles ディレクトリに保存されます。ログ ファイルに使用されるディスク容量は、システム負荷および収集するパフォーマンス データの総量によって、大きく異なります。デフォルトの設定を使用すると、2 ヶ月から 6 ヶ月のうちにログ ファイルが最大の 60 MB に達することが予想されます。ただし、トランザクションを追跡しない場合は、最大サイズは 50 MB です。Performance Agent ログ ファイルに必要なデータ記憶領域の制限および設定方法については、『HP Performance Agent for Windows ユーザー マニュアル』の第 3 章を参照してください。

- アーカイブされたログ ファイル : Performance Agent のログ ファイルが最大サイズに達すると、最も古いデータが自動的にロールアウトされ、さらなるデータの保管領域が確保されます。Performance Agent の自動ロールアクション、および効果的なデータ収集管理方法についての詳細は、『HP Performance Agent for Windows ユーザー マニュアル』の第 2 章を参照してください。

- 一時ファイル：Performance Agent のインストールプログラムは、<\$TEMP\$> ディレクトリに、約 10 MB の一時ファイルのための記憶領域を使用します。インストールが完了すると、この領域は解放されます。Performance Agent は、スキャン、分析、およびステータスの各操作に関する一時ファイルを保存するために、通常の動作中にも <\$TEMP\$> ディレクトリを使用します。必要な空きディスク容量の正確なサイズは、同時に開くレポートの数およびサイズにより異なります。

ネットワークに関する考慮点

Performance Agent は、TCP/IP ネットワーク プロトコルをインストールおよび実行していないと、インストールすることができません。この点について確認するには、Windows コントロール パネルの [管理ツール] の [サービス] で TCP/IP を検索します。

DNS (Domain Name System) ネーム サーバーを使用していない場合は、Performance Agent がインストールされている各システムに HOSTS ファイルが必要になります。HOSTS ファイルは、ホスト名を IP アドレスにマッピングするテキスト ファイルで、ローカルに保存されます。HOSTS ファイルは <\$windir\$>\system32\drivers\etc ディレクトリに保存し、UNIX システムにおける /etc/hosts ファイルと同じ形式にする必要があります。HOSTS ファイルには、接続する予定の Performance Manager および Operations Manager システムの名前と共に、Performance Agent システムの名前が含まれるようにします。

ターミナル サービスを使用した Performance Agent のインストール

ターミナル サービスを使用して Performance Agent をインストールする場合は、リモートの管理モードでターミナル サービスがインストールされていることを確認してください。Performance Agent は、コントロール パネルまたはコマンド プロンプトのいずれかによる端末セッションからインストールできます。

コントロール パネルからの Performance Agent のインストール

Performance Agent をコントロール パネルからインストールするには、次の手順を実行します。

- 1 [コントロール パネル] → [プログラムの追加と削除] を開きます。
- 2 [プログラムの追加] → [CD またはフロッピー] の順にクリックします。
- 3 [参照] をクリックし、**setup.exe** ファイルを選択します。
- 4 [完了] をクリックし、Performance Agent をインストールします。

コマンド プロンプトからの Performance Agent のインストール

Performance Agent を Windows コマンド プロンプトからインストールするには、次の手順を実行します。

- 1 [スタート] メニューから [ファイル名を指定して実行] をクリックします。
- 2 **cmd** と入力します。コマンド プロンプト ウィンドウが表示されます。
- 3 ドライブを Performance Agent の **setup.exe** ファイルが保存されているフォルダに変更します。
- 4 次のコマンドを入力します。

```
change user /install
```

次のメッセージが表示されます。

```
User session is ready to install applications
```


▶ メモ：リモートの管理モードでターミナルサーバーがインストールされている場合は、以下のメッセージが表示されます。

```
Install mode does not apply to a Terminal server  
configured for a remote administration.
```

5 **setup.exe** と入力して、インストールを完了します。

インストールまたはアップグレードの手順

Performance Agent は、DVD-ROM インストール メディアから利用可能で、数個のファイルセットから構成されています。ソフトウェアのサイズは約 70 MB です。

Performance Agent または GlancePlus をすでにシステムにインストールしている場合は、実行中のパフォーマンス ツールとプロセスをすべて終了します。

Performance Agent の終了

Performance Agent は Windows コマンド プロンプト、または次のような `mwacmd` (`mwacmd.exe`) コマンドを使用するバッチ ファイルから終了することができます。

`mwacmd stop` または `mwacmd stop all`

すべての Performance Agent サービスをコマンド プロンプトから終了します。

▶ `ttd` を終了する場合、ARM 装備のアプリケーションを終了してから、`ttd` と Performance Agent のプロセスを再起動してください。

Performance Agent のインストール

Administrator または Administrators グループのメンバーとして、Windows システムにログオンします。次の 2 つのモードのいずれかを使用して、Performance Agent をインストールできます。

- 手動インストール
- 自動インストール

手動インストール

以下のインストール手順に従って、Performance Agent をインストールします。この手順は、数分で終了します。

- 1 すでにインストールしている Performance Agent をこのバージョンに更新する場合は、すべての Performance Agent ウィンドウとプログラム、および他に使用しているアプリケーション ウィンドウ (Windows コントロール パネルを含む) を終了します。
- 2 DVD-ROM ドライブに Performance Agent DVD を挿入します。DVD 内の Performance Agent ファイルが表示されます。
- 3 Win フォルダを選択します。
- 4 表示される手順に従います。



- ネットワーク ドライブ上に Performance Agent をインストールすることはできません。Performance Agent は、ネットワーク ドライブが接続される前に、起動時に開始されます。
- システムのディスク パフォーマンス カウンタが停止している場合、このカウンタが実行されなければディスク メトリックが収集されないというメッセージが表示されます。**diskperf -Y** コマンドで、論理ディスクおよび物理ディスクのパフォーマンス カウンタを実行してください。ディスク パフォーマンス カウンタの実行は、システムのリポート後に有効になります。
- システムを再起動したときに、自動で Performance Agent が開始されるよう指定していない場合は、第 2 章、「HP Performance Agent の実行方法」に記述されている手順で、Performance Agent を手動で開始する必要があります。
- ARM 技術を使用するアプリケーションをシステムで実行している場合は、システムは再起動のメッセージを表示します。
- リモート プロシージャ コール (RPC) サービスが開始されていない場合、Performance Agent 設定プログラムがこのサービスを開始し、システムの再起動時に自動で開始するよう設定します。

Performance Agent のアップデートについては、『Performance Agent リリース ノート』を参照してください。『Performance Agent リリース ノート』には、ドキュメント一覧には含まれていない情報が記載されています。

自動インストール

自動インストールを実行するには、Windows コマンド プロンプトのコマンド ライン オプションで、`setup.exe /s` コマンドを実行します。

以下の手順で、自動インストールを開始します。

- 1 Windows コマンド プロンプトを開き、次のように入力して、Performance Agent の `setup.exe` ファイルが置かれているドライブに移動します。

<ドライブ>:

ここでの <ドライブ> は、Performance Agent ファイルが含まれている CD-ROM のドライブです。

- 2 コマンドの構文と利用可能なオプションは以下のとおりです。

自動インストールを有効にするには、次のように入力します。

```
setup.exe /s[/z"-p1 <インストール ディレクトリのパス> -p2  
<データ ディレクトリのパス> -s -v "]
```

ここで使用できるオプションの説明を以下に示します。

- **-p1:** インストール ディレクトリ パスの入力を指定するために使用します (デフォルトのディレクトリ パスは `C:\Program Files\HP\HP BTO Software` です)。
- **-p2:** データ ディレクトリ パスの入力を指定するために使用します (デフォルトのディレクトリ パスは `C:\Documents and Settings\All Users\Application Data\HP\HP BTO Software\data` です)。
- **-s:** インストール後、Performance Agent サービスを直ちに開始する場合に使用します。
- **-v:** Performance Agent サービスの開始方法を、「自動 (Automatic)」ではなく「手動 (Manual)」に設定する場合に使用します。
- **/s:** 自動モードでインストールを実行する場合に使用します。
- **/z:** インストール プログラムに入力を指定する場合に使用します。入力は「"」内に指定します。

インストール結果

Performance Agent ファイルがデフォルトまたは指定した場所にインストールされると、設定プログラムは次の処理を実行します。

- Performance Agent サービスを制御するための Performance Agent コントロールパネル アプレットがインストールされます。Performance Agent サービスについての説明は、第 2 章、「HP Performance Agent の実行方法」を参照してください。
- Windows では、[Performance Agent] フォルダが [スタート] → [プログラム] メニューに追加されます。このフォルダのサブメニューには、Performance Agent プログラム用のアイコンやコマンド、オンライン ヘルプ、およびリリース ノートが含まれています。
- システム パス変数が変更され、< インストール ディレクトリ > \bin\ が含まれます。

ディレクトリ構造

アップグレード インストールの場合、ファイルは以前にインストールされたバージョンと同じディレクトリに自動的に配置されます。

デフォルトのファイルの配置は以下のとおりです。

- プログラムおよび他のファイルは、< インストール ディレクトリ > \bin\ ディレクトリのサブディレクトリに保存されます。
- データ ファイル (ログ ファイルおよびデータを含む他のファイル) は、< データ ディレクトリ > \ ディレクトリのサブディレクトリに保存されます。

環境変数 *windir* は、システムの Windows ディレクトリを指示するために使用します。環境変数 *TEMP* は、Windows システムで一時ファイルが保存されるディレクトリを指示するために使用します。



ストライプ処理されたディスク : このオプションでは、ストライプ処理されたディスク セットの物理ドライブに対して、ディスク パフォーマンス カウンタを使用できません。ストライプ処理されたディスクのデータを収集する場合は、Windows コマンド プロンプトから **diskperf -YE** を実行します。

Operations Manager を使用する Performance Agent のインストール

Operations Manager for UNIX 8.x を使用している場合、管理サーバーから Windows の管理ノードに、HP Performance Agent をインストールすることができます。

Operations Manager for UNIX 8.x 管理サーバーからのインストール方法の詳細は、『HP Operations Manager for UNIX システム管理リファレンスガイド』の「HP Performance Agent」の章を参照してください。

仮想マシン上の Performance Agent

バージョン 4.60 以降の Performance Agent は、VMware ESX Server コンソール 2.5.2 以降および 3.0.x にホストされた仮想マシン (VM) の監視に対応しています。インストール手順については、「インストールまたはアップグレードの手順」を参照してください。

- 仮想マシンに **VMWare Tools** をインストールします。仮想マシンにインストールされた Performance Agent (VMWare ESX Server コンソール 2.5.2 以降にホスト) では、VMWare Tools を使用して、仮想マシンをゲスト オペレーティングシステムとして認識させる必要があります。
- VMware ESX Server コンソール 3.0.x にホストされた仮想マシンでは、仮想マシンの **VMware Guest API** を有効にします。仮想マシンによるシステムの物理リソースの使用量データを取り込むために、Performance Agent では **VMWare Guest API** を使用します。**VMware Guest API** の詳細については、VMWare の **VMware Guest SDK** で利用できる最新の資料を参照してください。



すべてのメトリックとその説明が記載されたリストは、リリースノートおよび『Dictionary of Performance Metrics』を参照してください。

Performance Agent の削除

Administrator または Administrators グループのメンバーとして、Windows システムにログオンします。次の 2 つのモードのいずれかを使用して、Performance Agent をシステムからアンインストールできます。

- 手動アンインストール
- 自動アンインストール

手動アンインストール

以下の手順で、アンインストール プログラムを使用した Performance Agent のアンインストールを実行することができます。

- 1 Administrator または管理者権限のあるユーザーで、Windows システムにログオンします。
- 2 Performance Agent プログラム、Performance Agent サービス ウィンドウ、および Windows コントロール パネルを終了します。
- 3 [コントロール パネル] → [プログラムの追加と削除] を開きます。
- 4 [HP Performance Agent Software] を選択します。
- 5 [変更と削除] をクリックしてアンインストールを実行します。

自動アンインストール

自動アンインストールを実行するには、Windows コマンド プロンプトのコマンドライン オプションで、`setup.exe /s /x` コマンドを実行します。

コマンド プロンプトからアンインストールを行うには、以下のように入力します。

```
setup.exe /s /x [/z"-r all"]
```

ここで使用できるオプションは以下のとおりです。

- `-r all`: Performance Agent で作成されたログ ファイルの削除を指定します。
- `/s`: 自動モードでアンインストールを実行する場合に使用します。

- **/x:** アンインストールを実行するために使用します。
- **/z:** インストールプログラムに入力を指定するために使用します。
入力は「"」内に指定します。

すべての Performance Agent ファイルの削除

デフォルトでは、アンインストールプログラムによって、Performance Agent の設定ファイル、ステータス ファイル、およびログ ファイルは削除されません。また、< インストール ディレクトリ >\bin\ もシステム パス変数から削除されません。これらをシステムから消去する場合は、手動で削除することができます。システムに RPM ツール アプリケーション (Performance Manager / Reporter など) がインストールされている場合は、追加ファイルの削除や、パス変数の変更を行わないでください。

Performance Agent が手動のアンインストールの際に最後に削除される RPM ツール アプリケーションである場合、< インストール ディレクトリ >\bin\ および <データ ディレクトリ >\ ディレクトリ内のすべてのファイルを消去するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

また、自動アンインストール中に `-r all` オプションを使用して、< インストール ディレクトリ >\bin\ ディレクトリおよび <データ ディレクトリ >\ ディレクトリ内のすべてのファイルを削除することもできます。



アンインストール後、Performance Agent アンインストールプログラムにより、一部の項目が削除できなかったことを通知するメッセージが表示されることがあります。アンインストールプログラムは、これらのファイルに次回のシステム再起動時に削除を行うことを示すマークを付けます。このメッセージが表示された場合は、Performance Agent を再インストールする前に、システムを再起動します。

アンインストールの結果

アンインストールプログラムは `perfstat.exe` 以外の Performance Agent プログラム ファイルを削除します。ただし、Performance Agent がシステムにインストールされた唯一の RPM ツールである場合は、`perfstat.exe` も削除されます。アンインストールプログラムは、Performance Agent に関連した Performance Agent サービスおよび Windows レジストリ エントリも削除します。

2 HP Performance Agent の実行方法

はじめに

この章では、Performance Agent を Windows システムにインストールした後のプログラムの起動と実行に関する作業について説明します。

次の内容を取り上げます。

- Performance Agent サービスの起動と終了
- Performance Agent 用の通信モードの設定
- ファイアウォールを介した通信
- 安全な通信の設定
- データソースの設定
- 設定オプション
- アラームの定義
- バックアップに関する考慮点



データソース統合 (DSI: Data Source Integration) 機能を使用して、他のソースのデータを記録する場合は、『HP Performance Agent for Windows データソース統合ガイド』を参照してください。

Performance Agent は 32 ビットおよび 64 ビット Windows システムでの RPC モードに適合する HTTP データ通信メカニズムに対応しています。Performance Agent を初めてインストールする場合、デフォルトのデータ通信モードは HTTP です。

Performance Agent をアップグレードする場合は、以前に使用していたデータ通信モードが用いられます。データ通信モードを HTTP/RPC モードに移行するには、インストール後に設定を変更する必要があります。詳細は、36 ページの「[HTTP 環境での通信](#)」を参照してください。Performance Agent は、Operations Manager 環境でのみ、安全性の高い HTTPS データ通信に対応しています。

セキュリティに関する制限

以下のセキュリティ関連の制限事項は、Performance Agent サービスの制御に適用されます。

- Performance Agent サービスを起動または終了するには、Administrators グループまたは Power Users グループのメンバーである必要があります。
- Performance Agent 設定ファイルをリフレッシュするには、Administrators グループまたは Power Users グループのメンバーである必要があります。
- Performance Agent サービスを設定するには、Administrators グループのメンバーである必要があります。

すべてのユーザーは、Windows コントロール パネルの [サービス] プログラムから、または Windows コントロール パネルの [管理ツール] 内の [サービス] プログラムから、Performance Agent サービスの状態を確認することができます。

Performance Agent サービスの起動と終了

インストールが完了したら、Windows の GUI またはコマンド プロンプトから Performance Agent を起動できます。

Windows GUI からの起動と終了

Windows の GUI から Performance Agent を起動するには、以下の手順に従います。

- 1 Performance Agent を開くには、[**スタート**] → [**プログラム**] → [**HP**] → [**Performance Agent**] → [**HP Performance Agent Software**] の順にクリックします。または、Performance Agent のメイン ウィンドウの [**Agent**] メニューから、[**Start/Stop**] をクリックします。または、Windows コントロールパネルから、[**PA**] をダブルクリックして、[**Performance Agent Start/Stop**] ダイアログ ボックスを開きます。
- 2 すべての Performance Agent サービスを起動するには、[**Start Services**] をクリックします。
- 3 すべての Performance Agent サービスを終了するには、[**Stop Services**] をクリックします。

コマンド プロンプトからの起動と終了

Windows のコマンド プロンプトから、または以下のような `ovpacmd` (`ovpacmd.exe`) コマンドを使用するバッチ ファイルから、Performance Agent サービスを起動および終了することができます。

- **`ovpacmd start` または `ovpacmd start all`**

すべての Performance Agent サービスをコマンド プロンプトから開始します。

- **`ovpacmd stop` または `ovpacmd stop all`**

すべての Performance Agent サービスをコマンド プロンプトから終了します。



後方互換性を確保するために、今回のリリースでも実行ファイル `mwacmd.exe` が提供されています。このファイルの機能は、`ovpacmd.exe` と同じです。

Performance Agent サービスの状態の確認

Performance Agent サービスの状態を確認するには、以下の手順に従います。

- **[HP]** → **[Performance Agent]** → **[Status]** を選択します。または、
- メイン ウィンドウの **[Agent Status]** アイコンをクリックします。または、コマンド プロンプトから以下のコマンドを実行して、Performance Agent サービスの状態を確認します。

```
perfstat
```

システム再起動時の自動起動

システムの再起動時に Performance Agent サービスを自動で起動するインストール オプションを選択しなかった場合は、以下の手順で自動起動を有効にします。

- 1 **[コントロール パネル]** の **[管理ツール]** で、**[サービス]** を選択します。
- 2 **[PA Collector]** を選択して、**[スタートアップ]** をクリックし、**[スタートアップの種類]** に **[自動]** を選択します。
- 3 Performance Agent、Performance Agent Transaction Manager、Performance Agent Extended Collector、および Performance Agent DSI Service に対して、手順 2 を繰り返します。

Performance Agent Measurement Interface には、自動起動を設定しないでください。

Performance Agent の再起動

Performance Agent を再起動するには、29 ページの「[Performance Agent サービスの起動と終了](#)」に記載されている手順のいずれかに従って、Performance Agent を終了し、起動します。

Performance Agent サービスのリフレッシュ

Performance Agent 設定ファイル (parm.mwc、ttdconf.mwc、alarmdef.mwc、dsiconf.mwc) を編集する場合、対応するサービスをリフレッシュして、設定ファイルに加えた変更を反映させる必要があります。**[Refresh]** ボタンを有効にするには、**[Performance Agent Services]** ダイアログ ボックスから少なくとも 1 つの **[Configuration Parameter]** を選択します。

Windows GUI からのリフレッシュ

- 1 Performance Agent のメイン ウィンドウの **[Agent]** メニューから、**[Start/Stop]** をクリックします。または、Windows コントロール パネルから、**[OVPA]** をダブルクリックして、**[Performance Agent Start/Stop]** ダイアログ ボックスを開きます。
- 2 変更を加えた設定パラメータを選択します。
- 3 **[Refresh]** ボタンをクリックします。このボタンを有効にするには、**[Performance Agent Services]** ダイアログ ボックスで少なくとも 1 つの **[Configuration Parameter]** を選択します。

コマンド プロンプトからのリフレッシュ

Windows コマンド プロンプトを開き、次のように入力します。

```
ovpacmd refresh <設定>
```

ここで **<設定>** には、以下の内容が入ります。

- parm.mwc に対しては、**COL**
- ttdconf.mwc に対しては、**TRAN**
- alarmdef.mwc に対しては、**ALARM**
- dsiconf.mwc に対しては、**DSI**

異なるデータ通信モードで開始されるサービス

RPC

HP OpenView Ctrl Service

Performance Agent Collector

Performance Agent Alarm Generator
(アラームに perfalarm が使用されている場合のみ)

Performance Agent DSI Service

Performance Agent Extend Collector

Performance Agent Measurement Interface

Performance Agent Transaction Manager

Performance Agent (perfalarm が存在しない場合のみ alarmgen を開始します)

HTTP

HP OpenView Ctrl Service

Performance Agent Collector

Performance Agent Alarm Generator

Performance Agent DSI Service

Performance Agent Extend Collector

Performance Agent Measurement Interface

Performance Agent Transaction Manager

Performance Agent 用の通信モードの設定

Performance Agent は、HTTP および RPC の両方の通信モードに対応しています。現在のモードを表示するには、「**Ovpacmd getdatacomm**」と入力します。

通信モードを RPC または HTTP に変更するには、以下の手順に従います。

- 1 Performance Agent を終了します。
- 2 **ovpacmd setdatacomm <モード>** を実行します。ここで、<モード>には以下のいずれかが入ります。
 - **HTTP**: HTTP 通信モード
 - **RPC**: RPC 通信モード
- 3 Performance Agent を起動します。

ステータスの確認方法

Performance Agent を起動すると、<データ ディレクトリ>に数個のステータスファイルが作成されます。

perfstat コマンドを使用して、Performance Agent のすべてまたは一部のプロセスのステータスを確認できます。

次のステータス ファイルには、ファイルを生成するプロセスで生じる障害を解決するのに使用される診断情報が含まれます。

```
<データ ディレクトリ>\status.alarmgen  
<データ ディレクトリ>\status.perflbd  
<データ ディレクトリ>\status.rep_server  
<データ ディレクトリ>\status.scope  
<データ ディレクトリ>\status.perfalarm  
<データ ディレクトリ>\status.ttd  
<データ ディレクトリ>\status.mi  
<データ ディレクトリ>\log\coda.txt
```



Performance Agent プロセスがメッセージをファイルに書き込むたびに、ファイルのサイズが 1 MB を超えるかどうかを確認されます。1 MB を超える場合は、ファイル名が `status.filename.old` に変更され、新しいステータス ファイルが作成されます。

ディレクトリのサンプル

<インストール ディレクトリ >\examples\ ディレクトリには、設定ファイルと構文ファイルの例、および当社のパフォーマンス ツールをカスタマイズするために使用できるプログラム ファイルのサンプルが含まれています。たとえば、<インストール ディレクトリ >\example\config\ サブディレクトリには、サンプルのアラーム定義と parm ファイルのアプリケーション指定パラメータの例が含まれています。詳細については、<インストール ディレクトリ >\examples\ README ファイルを参照してください。

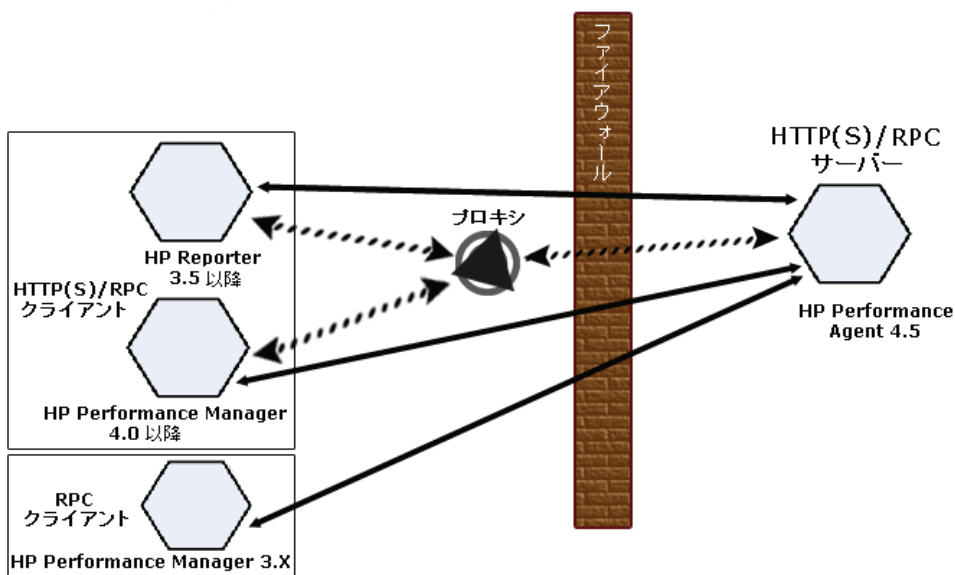
ファイアウォールを介した通信

一般に、ファイアウォールは2つのネットワーク間のデータの流れをフィルタリングする方法として定義することができます。Performance Agent では、クライアントとサーバー アプリケーション間のデータ アクセスに関して、以前からパケットフィルタリング ネットワーク ファイアウォールを介した通信メカニズムに対応していましたが、今回さらに、HTTP 1.1 ベースの通信インターフェイスに対応しました。HTTP ベースのインターフェイスはプロキシが使用できるため、柔軟で、ポート数が少なくすみ、ファイアウォールに適しています。

▶ Performance Agent は、Operations Manager 環境でのみ、証明書ベースの安全なデータ通信 (HTTPS) に対応しています。詳細は、45 ページの「[証明書の使用](#)」を参照してください。

2つのシステム間にネットワーク ファイアウォールがある場合は、Performance Manager および Reporter が Performance Agent システムからデータを取得します。

図 1 ファイアウォール環境での Performance Agent との通信

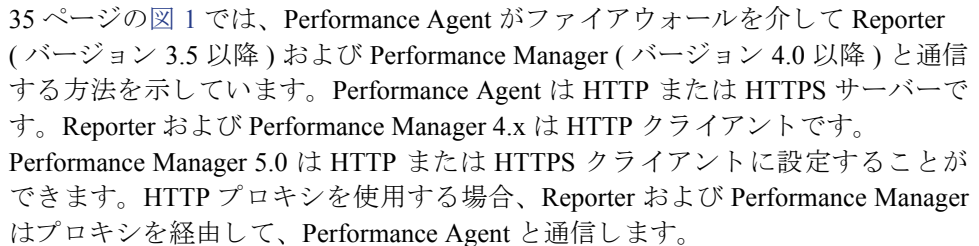


▶ Performance Manager 3.x という名称は、以前 PerfView と呼ばれていた製品を指します。

HTTP 環境での通信

ファイアウォールを設定するためには、通信を開始するシステム (クライアント) および通信要求を受信するシステム (サーバー) を把握し、それに応じてファイアウォールのルールを設定することが重要です。典型的なリモート通信では、ソースポートを使用しているクライアントが、リモートシステムの宛先ポートをリスンしているサーバーに接続します。クライアントおよびサーバーのデータフローを含む、ファイアウォール環境を把握します。以下のタスクを実行し、ファイアウォール環境での Performance Agent との通信を設定します。

- 1 Performance Agent ポートの設定 .
- 2 ファイアウォール環境での HTTP クライアントの設定 .
- 3 ファイアウォール設定の確認 .

35 ページの  1 では、Performance Agent がファイアウォールを介して Reporter (バージョン 3.5 以降) および Performance Manager (バージョン 4.0 以降) と通信する方法を示しています。Performance Agent は HTTP または HTTPS サーバーです。Reporter および Performance Manager 4.x は HTTP クライアントです。Performance Manager 5.0 は HTTP または HTTPS クライアントに設定することができます。HTTP プロキシを使用する場合、Reporter および Performance Manager はプロキシを経由して、Performance Agent と通信します。

Performance Manager バージョン 3.x は PerfView テクノロジーを使用しています。PerfView は HTTP 通信コンポーネントを使用しませんが、DCE データ通信モードが有効な場合には、Performance Agent 4.5 に接続します。

Performance Agent ポートの設定

ファイアウォール環境の Performance Agent ポートは、次のいずれかの方法で設定し、確認することができます。

- 2 ポート通信の設定
- 単一ポート通信の設定
- ポート設定の確認

BBC5 を使用する Performance Agent システムでは、デフォルトで BBC 通信ブローカーがポート 383 を使用し、coda は動的に割り当てられたポートを使用します。

BBC 通信ブローカー用のポート設定

BBC 通信ブローカーが使用するデフォルト ポートを設定できます。ovconfchg コマンドを使用して、Performance Agent システムでのポート設定を変更します。次のコマンドを入力します。

```
— ovconfchg -ns bbc.cb -set SERVER_PORT <ポート>
```

または、

```
— ovconfchg -ns bbc.cb.ports -set PORTS <ドメイン>:<ポート>
```

```
例: ovconfchg -ns bbc.cb.ports -set PORTS  
xyz.abc.com:50383
```

ポート変更には 2 番目のオプションのほうが適しています。

次のコマンドを入力して、Performance Agent を再起動します。

```
ovpa restart server
```

2 ポート通信の設定

デフォルトでは、coda デーモンは、BBC 通信ブローカーが使用するポート 383 に加えて、動的に選択される 2 つ目のポートを使用します。ovconfchg コマンドを使用して、任意の well known ポートをリッスンするよう coda のポートを設定することができます。次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns coda.commm -set SERVER_PORT <ポート番号>
```

```
ovpa restart server
```



ファイアウォールを介してリモートから Performance Agent に接続する場合、動的なポートの使用が難しいことがあります。これは、ファイアウォールのどのポートを開くべきか把握できない場合があるためです。

単一ポート通信の設定

Performance Agent システムでは、BBC 通信ブローカーがポート 383 を使用し、coda は動的に割り当てられたポートを使用します。ovconfchg コマンドを使用して、通信ブローカーが使用するポートを共有するよう coda のポートを設定することができます。次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns coda.commm -set SERVER_BIND_ADDR localhost
```

ovpa restart server



単一ポート通信が設定されている状態で2ポート通信を有効にするには、次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns coda.comm -set SERVER_BIND_ADDR
```

ポート設定の確認

ポート設定を確認するには、次のコマンドを入力します。

perfstat -d

次の情報が出力されます。

- coda が使用するポートのポート番号
- BBC 通信ブローカーが使用するポートのポート番号
- ポート設定
- 安全性の高い通信が有効かどうか
- coda メトリック収集が有効かどうか

次に例を示します。

```
Datacomm configuration :
-----
Coda Port                               49552 (Dynamic)
                                         Two port Communication
BBC communication broker port           383
SSL security                             NONE
Coda Metric Collection(Prospector)     Disabled
```

ファイアウォール環境での HTTP クライアントの設定

ファイアウォール環境で HTTP クライアントを設定する方法は2つあります。

- HTTP プロキシを用いた、HTTP クライアント (Reporter または Performance Manager) の設定
- HTTP プロキシを使用しない、HTTP クライアント (Reporter または Performance Manager) の設定

どちらの場合にも、Performance Agent ノードからデータにアクセスするには、HTTP サーバー (Performance Agent) 側のポートが 1 つだけ開いている必要があります。

HTTP プロキシを用いた、HTTP クライアント (Reporter または Performance Manager) の設定

ファイアウォールを介して通信する場合は、HTTP プロキシの使用をお勧めします。この方法では、環境内ですでに使用されているプロキシを用いることにより、設定が簡略化されます。プロキシが双方向で使用されている場合、ファイアウォールでは厳密に 1 つのポートを開く必要があります。Performance Agent により収集されたデータにアクセスするには、HTTP サーバー (Performance Agent) 用のポートと HTTP クライアント (Reporter および Performance Manager) 用のポートが開かれている必要があります。



デフォルトの 383 ポートは変更しないことをお勧めします。

HTTP プロキシを使用する場合は、Windows または UNIX 対応の Reporter および Performance Manager に対して、Performance Agent に接続するために使用するプロキシを指定する必要があります。

Performance Manager バージョン 5.0 以降および Reporter 3.7 を設定するには、次の手順を実行します。

次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set PROXY proxy:port+(a)-(b)
```

変数 *a* および変数 *b* は、プロキシに適用するホスト名、ネットワーク、および IP アドレスをコンマで区切った形式のリストです。区切り記号「;」または「,」を使用して、1 つの PROXY キーに対して複数のプロキシを定義することができます。リストの前の「-」は、それらの要素では対象のプロキシが使用されないことを示し、リストの前の「+」は、それらの要素で対象のプロキシが使用されることを示します。最初に適合したプロキシが使用されます。

Reporter バージョン 3.6 以前および Performance Manager 4.x を設定するには、次の手順を実行します。

/var/opt/OV/conf/BBC/default.txt 設定ファイルを編集します。

たとえば、default.txt ファイルの [DEFAULT] セクションで、PROXY に関連する行を特定し、次のように PROXY パラメータを設定します。

```
PROXY web-proxy.hp.com:8088-(localhost, *.hp.com) + (*)
```

この例では、ローカルマシン (localhost) への要求、および HP 内 (たとえば、**www.hp.com** のような、*.hp.com に合致するもの) への要求を除いて、web-proxy プロキシが、すべてのサーバー (*) に対してポート 8088 で使用されます。

HTTP プロキシを使用しない、HTTP クライアント (Reporter または Performance Manager) の設定

HTTP プロキシが利用できない場合は、HTTP クライアント (Reporter および Performance Manager システム) 上で、追加の設定が必要になります。

Reporter および Performance Manager for Windows が同一のシステムにインストールされていて、双方が同時に Performance Agent にアクセスする場合は、このセクションに記載されている方法でポート範囲を指定します。それらが異なるシステムで実行されている場合は、それぞれに単一のポートを指定することができます。使用している Performance Manager および Reporter のバージョンに合わせて、次のオプションを選択します。

Performance Manager 5.0 以降および Reporter 3.7 を設定するには、次の手順を実行します。

次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set CLIENT_PORT <ポート範囲>
```

<ポート範囲> は、使用するポート範囲です。

次に例を示します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set CLIENT_PORT 14000-14003
```

Reporter バージョン 3.6 以前および Performance Manager 4.x を設定するには、次の手順を実行します。

/var/opt/OV/conf/BBC/default.txt ファイルを、以下のように編集します。

- 1 CLIENT_PORT に適用される行を特定して、;CLIENT_PORT = の行をコメント解除します。
- 2 CLIENT_PORT パラメータに、ポート範囲を指定します。次に例を示します。

```
CLIENT_PORT = <ポート範囲>
```

<ポート範囲> は、使用するポート範囲です。次に例を示します。

```
CLIENT_PORT = 14000-14003
```


ファイアウォール設定の確認

設定を確認するには、次のコマンドを使用します。

```
ovcodautl -ping -n <システム名>
```

このコマンドの出力には、通信設定の状態が表示されます。

複数の IP アドレスを持つシステムの設定

ご使用の環境に、複数のネットワーク インターフェイスおよび IP アドレスを持つシステムがあり、HTTP ベースの通信に専用のインターフェイスを使用する場合は、CLIENT_BIND_ADDR パラメータおよび SERVER_BIND_ADDR パラメータで、使用する IP アドレスを指定することができます。

- Performance Agent (サーバー) システム上に複数のネットワーク インターフェイスおよび IP アドレスがある場合は、SERVER_BIND_ADDR パラメータを次のように指定します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set SERVER_BIND_ADDR <IP アドレス>
```

- Performance Manager 5.0 (クライアント) システム上に複数のネットワーク インターフェイスおよび IP アドレスがある場合は、CLIENT_BIND_ADDR パラメータを次のように指定します。

```
ovconfchg -ns bbc.http -set CLIENT_BIND_ADDR <IP アドレス>
```

- Reporter/Performance Manager 4.x システム上に複数のネットワーク インターフェイスおよび IP アドレスがある場合は、CLIENT_BIND_ADDR パラメータを指定します。

/var/opt/OV/conf/BBC/default.txt ファイルを、以下のように編集します。

- a CLIENT_BIND_ADDR に適用される行を特定して、以下の行をコメント解除します。

```
;CLIENT_BIND_ADDR =
```

- b CLIENT_BIND_ADDR パラメータに、IP アドレスを指定します。

RPC 環境での通信

Performance Agent は、パケットフィルタリング ネットワーク ファイアウォールを介した通信に対応しています。これにより、ネットワーク ファイアウォールが設置されているシステム間においても、Performance Agent から Performance Manager 3.x にアラームを送信することができ、また、リモート システム上の Performance Agent からのデータを、Performance Manager 3.x でグラフ化することができます (UNIX 対応の Performance Manager 3.x を設定して、制限されたポート アドレスを使用するには、『HP Performance Manager インストール ガイド』を参照してください)。

Windows システム上で動作しているアプリケーションで、UDP、TCP、RPC ポートを制限するには、以下の手順に従います。

regedt32 を使用して、レジストリ キーを以下の例のように作成します。この例では、2200 から 2300 を使用するポートの制限に関する設定を示しています。

新しいレジストリ キーは次のとおりです。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Microsoft\Rpc\Internet
```

以下の値を追加します。

種類	名前	値
REG_SZ	PortsInternetAvailable	"Y"
REG_SZ	UseInternetPorts	"Y"
REG_MULTI_SZ	Ports	2200-2300

詳細については、MSDN の記事「Configuring the Windows XP/2000/NT Registry for Port Allocations and Selective Binding」を参照してください。

現在 Performance Agent では、Windows で動作する UDP RPC ポートを、アプリケーションごとの規則に基づいて制限することはできません。ポートに基づくパケット フィルタリング ファイアウォールを使用している場合、ファイアウォールを介して通信するために、1023 より大きな番号のポートをすべて開く必要があります。

ポートではなく IP アドレスに基づく内部ネットワークへのアクセスを、Windows ノードに対して許可するには、以下の手順に従います。

- 1 Windows ノードをファイアウォールの外側で設定し、ファイアウォールの IP アドレスをゲートウェイとして使用します。

- 2 Windows ノードが存在するローカルまたは SUBNET のルーティング テーブルに、ファイアウォールの IP アドレスを追加します (表 2 を参照)。
- 3 ファイアウォールを設定して、Windows ノードから内部ネットワークにアクセスできるようにします。

Windows ノードが存在する SUBNET のセキュリティ ポリシー、Windows ノードのデフォルト ゲートウェイ設定、および内部ネットワークのファイアウォール設定によって、これらの手順の実行方法が異なります。環境に変更を加える前に、ファイアウォールの管理者またはネットワーク セキュリティ担当者に相談してください。

ファイアウォールの設定に関する表

ファイアウォールに関する宛先と送信元の変数は、ファイアウォール内のアプリケーションやそのアプリケーションが実行されているオペレーティング システムにより異なります。

表 1 Windows 版 Performance Manager 3.x 以降 (PV)、Windows 版 Reporter (OVR)、Windows 版 Performance Agent

通信元	ポート番号 / プロトコル	宛先	ポート番号 / プロトコル
PV、OVR	1024-65535/UDP	MS_RPC サービス	135、1024-65535/UDP
PV、OVR	382/TCP	Performance Agent	382/TCP
PV、OVR	1024-65535/UDP	Performance Agent	1024-65535/UDP
Performance Agent	1024-65535/UDP	MS RPC サービス	135、1024-65535/UDP
Performance Agent	1024-65535/UDP	Performance Manager	1024-65535/UDP

表 2 UNIX 版 Performance Manager 3.x 以降、Windows 版 Performance Agent

通信元	ポート番号 / プロトコル	宛先	ポート番号 / プロトコル
Performance Manager/UNIX	OVPM_RANGE/ UDP	MS RPC サービス	135、1024-65535/UDP
Performance Manager/UNIX	382/TCP	Performance Agent/ WIN	382/TCP
Performance Manager/UNIX	OVPM_RANGE/ UDP	Performance Agent/ WIN	1024-65535/UDP
Performance Agent/WIN	1024-65535/UDP	DCE デーモン	135、OVPM_RANGE/ UDP
Performance Agent/WIN	1024-65535/UDP	Performance Manager/UNIX	OVPM_RANGE/UDP

OVPM_RANGE は、Performance Manager に対して算出されたポートの範囲です。

安全な通信の設定

Performance Agent は証明書ベースの安全性の高い通信、およびクライアント認証ベースの通信に対応しています。

証明書の使用

Performance Agent は、Operations Manager 8.x 環境でのみ、証明書ベースの安全なデータ通信に対応しています。

Operations Manager で安全性の高い通信を設定するには、『HP Operations Manager for UNIX Firewall Concepts and Configuration Guide』を参照してください。Operations Manager 8.x HTTPS エージェントについての詳細は、『HP Operations Manager HTTPS Agent Concepts and Configuration Guide』を参照してください。

Operations Manager 8.x 環境ですでに HTTPS 通信を設定している場合は、Performance Agent と Performance Manager 5.0 の間の安全な通信を設定するために、以下の変更を行います。



Performance Manager 4.x は証明書ベースの安全性の高い通信には対応していません。

Performance Agent システムでは、coda に関して、SSL_SECURITY に REMOTE を設定します。次のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -ns coda -set SSL_SECURITY REMOTE  
ovcodautil -config
```

クライアント認証の使用

オプションとして、Performance Manger 3.x または Reporter などの製品からのクライアント接続の認証を、Performance Agent で実行することができます。この認証機能を利用することで、特定の Performance Agent インスタンスについて、そのインスタンスへのクライアント接続を許可するホストを指定できます。

クライアント認証機能は、あらゆるバージョンの Performance Manager および Reporter クライアントからの接続を有効または無効にします。この機能を利用するにあたって、クライアント ソフトウェアを更新する必要はありません。

認証プロセスは、認証されるクライアントに透過的に行われるため、クライアント接続は表面上、Performance Agent の過去のバージョンを使用していたときと同じように処理されます。未認証のクライアントには、サービス拒否を示すメッセージが表示されます。

authip ファイルによる認証の有効化

authip というファイルが存在する場合、認証は有効になります。HTTP ベースの通信用の authip ファイルは、< データ ディレクトリ >\data\conf\perf ディレクトリにあります。RPC ベースの通信用の authip ファイルは、< ディスク ドライブ >:\Program Files\HP\HP BTO Software\data\ディレクトリにあります。authip ファイルにはホストのリストが含まれ、そのホストからのクライアント接続が許可されます。

- authip ファイルがデフォルトのディレクトリに存在する場合、クライアント接続が許可されるホストはこのファイルの内容によって決定されます。Performance Agent インスタンスと同じホストで実行されているクライアントは自動的に認証されるため、エントリを必要としません。長さがゼロの authip ファイルは、Performance Agent ホストで実行されているクライアントのみが接続できることを意味します。
- authip ファイルがデフォルトのディレクトリに存在しない場合は、認証が行われず、Performance Agent の過去のバージョンと同様に、すべてのクライアントに接続が許可されます。

authip ファイルは、クライアントが Performance Agent によるサービスを要求して登録を試みるたびに照会されます。authip ファイルに変更が加えられた場合、変更内容を有効にするために Performance Agent を再起動する必要はありません。



ただし、認証が不適格となるように後からサーバーの authip ファイルに変更を加えた場合でも、すでに認証が完了している既存のクライアント セッションは、Performance Agent による再認証を要求される処理をクライアントが行うまで、現行の接続を維持できます。authip の変更が反映されたことを確認するには、すべての Performance Agent サービスを終了して、再起動することが必要な場合があります。その後、データ ソースを開き直す場合には、authip ファイルの再読み込みが行われるため、接続は拒否されます。

アラーム用の Performance Manager 3.x 登録では、クライアントがデータ ソースを削除するまで (閉じるだけでは不十分) 承認済みクライアントはアラームを受け取り続けます。agdb ファイルに対しエントリを追加または削除するには、agsysdb ユーティリティ プログラムを使用します。『HP Performance Agent for Windows ユーザー マニュアル』を参照してください。さらに、Performance Manager 3.x を使用して、アラームを有効または無効にすることもできます。

Performance Agent クライアント 認証機能では、使用するネットワークで authip ファイルに含まれるクライアント エントリを解決できることが必要です。エントリの性質によっては、DNS、NIS あるいは <%windir%>\system32\drivers\etc\hosts ファイルなどによって提供されるネーム サービスが必要になる場合があります。Performance Agent ホストから各 authip エントリへ「ping」が成功すれば、クライアント エントリは解決されています。また、ファイアウォールを介したクライアント認証も同様に、authip ファイル中のクライアント エントリが Performance Agent ホストからの ping に応答する場合に機能します。

authip ファイルのフォーマット

authip ファイルは次のフォーマットに一致する必要があります。

- 1 行あたり 1 つのクライアント ホストをリストする
- クライアント エントリには、次のフォーマットのうち 1 つ (任意) を使用する
 - 完全修飾ドメイン名
 - エイリアス (alias)
 - ドットで 4 つに区切った IPv4 の IP アドレス
- 行の始めが「#」のラインは、コメントとして無視される
- ブランクあるいは長さがゼロの行は無視される
- IP アドレスは 0 から始めない。たとえば、23.10.10.10 の IP アドレスを、023.10.10.10 と表すことはできません。
- クライアント エントリの前には、スペースまたはタブを加えることができる
- クライアント エントリの行は、スペース、タブ、新しい行、または # の記号で終わる

<%windir%>\system32\drivers\etc\hosts エントリは次のようになります:
123.456.789.1 testbox testbox.group1.thecompany.com。testbox ホストからのクライアントは、authip ファイル内の次のエントリのいずれによっても接続可能です。

```
#===== authip ファイル エントリの例 =====  
#  
# IP アドレスを使用  
123.456.789.1  
# エイリアスを使用  
testbox  
# 完全修飾ドメイン名を使用  
testbox.group1.thecompany.com  
#===== authip ファイル エントリの例の終わり =====
```



認証機能 (authip ファイル内のエイリアスまたはホスト名) を使用するためには、ローカルシステムの DNS (Domain Name System) を適切に設定する必要があります。DNS の設定方法に関する詳細は、Microsoft Windows のオンライン ヘルプを参照してください。

データ ソースの設定

Performance Agent は、レポジトリ サーバーのセットを使用して、事前に収集したデータをアラーム ジェネレータや Performance Manager 分析製品に送信します。scopeux ログ ファイルや DSI ログ ファイルなどの特定のデータ ソースに対してそれぞれのレポジトリ サーバーがあります。各データ ソースには、1つのログ ファイルセットが含まれます。データ ソースは、<データ ディレクトリ>\conf\perf ディレクトリ内にある datasources ファイルで設定します。インストール後、初めて Performance Agent を実行する場合、デフォルトのデータ ソースである SCOPE が事前に設定されていて、scopeux ログ ファイルセットが提供されています。

他のデータ ソース用にレポジトリ サーバーを追加する場合、datasources ファイル内に設定します。Performance Agent の再起動時に、perflbd デーモンにより perflbd.mwc (<データ ディレクトリ>にある、datasources ファイルへのリンク) の検索と読み込みが行われます。その後、検出された各データ ソースに関するレポジトリ サーバーが起動されます。

Performance Manager 3.x および Reporter のデータ ソースの設定

Performance Agent のデータは、Performance Manager 3.x および Reporter で自動的に、アクセスとアラーム生成に関する設定が行われます。datasources ファイル (または、perflbd.mwc ファイル) で追加のデータ ソースを設定するには、『HP Performance Agent for Windows ユーザー マニュアル』の第 3 章および『HP Performance Agent for Windows データ ソース統合ガイド』の説明を参照してください。追加のデータ ソースには、生ログ ファイル、抽出ログ ファイル、Performance Agent のデータ ソース統合 (DSI: Data Source Integration) 技術で作成されたログ ファイル、または拡張収集ビルダおよびマネージャを使用して作成したデータ収集からのログ ファイルが含まれます。

IP アドレス

Performance Agent システムを Performance Manager 3.x のデータ ソースとして設定した後は、Performance Agent システムまたは Performance Manager 3.x システムの IP アドレスを変更しないようにします。

1 つ以上のシステムの IP アドレスを変更する必要がある場合は、問題を回避するために以下の手順に従います。

次の手順で、Performance Agent システムの IP アドレスを変更します。

- 1 Performance Manager 3.x システムで、[Performance Manager 3.x] ダイアログボックスの **[Data Sources]** メニューから、**[Manage]** を選択します。
- 2 既知のシステムのリストから、Performance Agent システムを削除します。
- 3 Performance Agent システムの IP アドレスを変更します。
- 4 Performance Agent システムを Performance Manager 3.x のデータ ソースとして再度追加します。

Performance Manager 3.x の IP アドレスを変更するには、Performance Manager 3.x のドキュメントを参照してください。

設定オプション

Performance Agent に含まれるデフォルトの設定ファイルを使用すると、組織内のシステムのパフォーマンスに対する監視を迅速に開始できます。デフォルトの設定を変更して、特定のコンピュータ使用環境での状況に適合させることができます。

パラメータ ファイルの収集 (parm.mwc)

デフォルトでは、Performance Agent は 60 MB の最大ログ ファイル サイズ (トランザクション追跡を行わない場合は 50 MB) を用いて、グローバル、プロセス、アプリケーション、トランザクション、およびディスク データを監視するように設定されます。

parm.mwc ファイルを使用して、監視するデータの種類を指定する、1 つのアプリケーションとして共に監視するプロセスのグループを設定する、ログ ファイルの最大サイズを変更するなど、各種のデータ収集パラメータをカスタマイズできます。詳細については、『HP Performance Agent for Windows ユーザー マニュアル』の第 2 章を参照してください。

トランザクション設定ファイル (ttdconf.mwc)

アプリケーション応答測定 (ARM: Application Response Measurement) API コールを備えたアプリケーションのトランザクション データを監視できます。ttdconf.mwc ファイルを使用すると、各トランザクションの条件を満たすように、トランザクション名、アプリケーション名、パフォーマンス分布範囲、およびサービス レベルの目標を定義できます。トランザクション追跡の詳細については、『HP Performance Agent for Windows トランザクション追跡』を参照してください。

データ収集のカスタマイズ

拡張収集ビルダおよびマネージャにより、Windows レジストリ カウンタのデータ収集をカスタマイズ / 設定することができます。Windows レジストリ カウンタの収集を構築し、管理する方法の詳細は、「拡張収集ビルダおよびマネージャ オンライン ヘルプ」を参照してください。このオンライン ヘルプを利用するには、Performance Agent のメイン ウィンドウの [Configure] メニューから、[**Extended Collections**] を選択します。次に、[Extended Collection Builder and Manager] ダイアログ ボックスの [**Help**] ボタンをクリックしてください。

データ ソース統合 (DSI: Data Source Integration) 技術を使用すると、別の方法でデータ収集をカスタマイズできます。データ収集方法の設定後に、DSI を使用してデータを Performance Agent に送信できます。DSI の使用に関する詳細は、『HP Performance Agent for Windows データ ソース統合ガイド』を参照してください。

アラームの定義

パフォーマンスをモニタするためにアラームを使用する場合、Performance Agent の `alarmdef` ファイルにあるアラーム定義セット内でアラーム発生条件を指定します。Performance Agent を最初にインストールしたときに、`alarmdef` ファイルにデフォルトのアラーム定義セットが含まれています。このデフォルトの定義を使用するか、または必要な場合はカスタマイズすることが可能です。

アラームの定義についての詳細は、『HP Performance Agent for Windows ユーザーマニュアル』の第7章「パフォーマンス アラーム」を参照してください。この章では、アラーム定義の構文、アラームの機能、パフォーマンスをモニタするためのアラームの使用方法について説明しています。

コマンド プロンプトからの Performance Agent サービスの制御

Performance Agent サービスは、Windows コマンド プロンプト、または次のような `ovpacmd` (`ovpacmd.exe`) コマンドを使用するバッチ ファイルから起動および終了することができます。

これらのコマンドを実行するには、Administrators または Power Users グループのメンバーである必要があります。

- **ovpacmd stop**
OV Performance Collector および Performance Agent サービスを終了します。
- **ovpacmd start**
OV Performance Collector、Performance Agent、Transaction Manager、Extended Collection の各サービスを起動します。
- **ovpacmd start dsi**
`dsiconf.mwc` ファイルで設定されているデータ送信を継続的に記録するためのデータ ソース統合サービスを起動します。
- **ovpacmd stop dsi**
`dsiconf.mwc` ファイルで設定されているデータ送信を継続的に記録するためのデータ ソース統合サービスを終了します。

コマンド プロンプトの使用例としては、業務時間外に使用するアラーム定義を自動的に別のセットに切り替える場合に、バッチ ファイルから Performance Agent のサービスを再起動して、Performance Agent 設定ファイルをリフレッシュすることが挙げられます。<データ ディレクトリ>\data ディレクトリに代替の `alarmdef.mwc` ファイルをコピーするコマンドを、バッチ ファイルに含めます。

バックアップに関する考慮点

Performance Agent がインストールされ稼動している Windows システムをバックアップするときには、次の点に注意してください。

- システムをバックアップするために、Performance Agent のサービスを終了する必要はありません。
- バックアップ中に Performance Agent のサービスが稼動している場合、次に示すファイルはバックアップされません。Performance Agent を開いている場合は、追加ファイルもバックアップの対象外となることがあります。使用しているバックアッププログラムに、開いているファイルをバックアップするためのオプションがある場合、このオプションを設定すると、開いているファイルもバックアップできます。

```
<データ ディレクトリ >\status.scope  
<データ ディレクトリ >\status.mi  
<データ ディレクトリ >\status.perflbd  
<データ ディレクトリ >\status.ttd  
<データ ディレクトリ >\status.rep_server  
<データ ディレクトリ >\status.alarmgen  
<データ ディレクトリ >\datafiles\logindx  
<データ ディレクトリ >\datafiles\logglob  
<データ ディレクトリ >\datafiles\logappl  
<データ ディレクトリ >\datafiles\logproc  
<データ ディレクトリ >\datafiles\logdev  
<データ ディレクトリ >\datafiles\logtran  
<データ ディレクトリ >\datafiles\agdb  
<データ ディレクトリ >\datafiles\agdb.lk  
<データ ディレクトリ >\datafiles\perflbd.pid
```

- Performance Agent の稼動中に、Performance Agent のログ ファイルをバックアップする場合は、それぞれの生ログ ファイル (logglob、logappl、logproc、logdev、および logtran) に含まれるデータの量が、多少異なることもあります。この状況は、各ファイルがわずかに時間をずらしてバックアップされるために生じます。このため、バックアップ テープからログ ファイルを復元する必要がある場合、データの解釈が難しくなることがあります。

- システムをバックアップする前に Performance Agent のサービスを終了するには、Performance Agent のメイン ウィンドウの [Agent] メニューから [Start/Stop] を選択します (この章で前述されている手順により、Windows コントロール パネル、コマンド プロンプト、またはバッチ ファイルを使用して、Performance Agent サービスを終了することもできます)。
- バックアップが終了したら、Performance Agent サービスを再起動します。



Performance Agent サービスの終了と起動により、データ収集が停止している間のログ ファイルに相違が生じます。

自動バックアップ

自動バックアップの前に、Performance Agent を終了する場合は、バッチ ファイルを用いて、Performance Agent サービスを制御します。バックアップの終了後に、Performance Agent を自動的に再起動させることができます。

ドキュメントの表示と印刷

Performance Agent ソフトウェアには、表示可能なフォーマットで、標準の Performance Agent ドキュメント一式が付属しています。Adobe Acrobat フォーマット (*.pdf) のドキュメントはオンラインで表示され、必要な場合は印刷できます。ASCII テキスト (*.txt) のドキュメントは印刷が可能です。テキスト エディタを使用すると、画面上でテキスト ファイルを表示できます。次の表で、ドキュメント、使用されているファイル名、およびオンラインのパスを示します。

表 3 Performance Agent ドキュメント一覧

ドキュメント	ファイル名	Windows でのパス
HP Performance Agent for Windows インストール、設定ガイド	ovpainst.pdf	インストールディレクトリ \paperdocs\ovpa\C
HP Performance Agent for Windows ユーザー マニュアル	ovpausers.pdf	インストールディレクトリ \paperdocs\ovpa\C
HP Performance Agent for Windows データ ソース統合ガイド	ovpadsi.pdf	インストールディレクトリ \paperdocs\ovpa\C
HP Performance Agent for Windows トランザクション追跡	tytnt.pdf	インストールディレクトリ \paperdocs\ovpa\C
アプリケーション応答測定 API ガイド	arm2api.pdf	インストールディレクトリ \paperdocs\arm\C
HP Performance Agent for Windows Dictionary of Operating System of Performance Metrics	metwin.txt	インストールディレクトリ \paperdocs\ovpa\C

リリース ノート

Performance Agent のマニュアルおよびオンライン ヘルプに記載されていない追加情報については、『Performance Agent リリース ノート』を参照してください。新機能と共に、従来の問題および現在認識されている問題の修正に関する説明や、これらの問題の対処方法が記載されています。インストールの最後に、このリリース ノートを参照することができます。また、インストール後は、[**スタート**] → [**プログラム**] メニューの [HP] → [Performance Agent] → [HP Performance Agent Software] フォルダから参照できます。

オンライン ヘルプ

HP ソフトウェアのプログラム フォルダまたは Performance Agent のメイン ウィンドウから、Performance Agent オンライン ヘルプにアクセスし、参照してください。同じ場所から、メトリックに関するオンライン ヘルプも利用できます。

Web 上でのドキュメントの参照

ここにリストしているドキュメントは、以下の HP ソフトウェア マニュアルの Web サイトでも参照できます。

http://ovweb.external.hp.com/lpe/doc_serv

製品リスト ボックスから「Performance Agent」、バージョン (OS が自動的に選択されます) の順に選択し、ドキュメントを指定した後、[**Open**] をクリックして表示します。[**Download**] をクリックして、コンピュータにファイルを保存することもできます。

Adobe Acrobat ファイル

Adobe Acrobat ファイルは、Acrobat 7.0 で作成されました。表示する場合は、Adobe Acrobat Reader バージョン 4.0 以降を使用してください。システムに Acrobat Reader がインストールされていない場合は、Adobe の Web サイトからダウンロードできます。

<http://www.adobe.com>

Acrobat Reader でドキュメントを表示している間は、1 ページ、複数ページ、または全ページ分のドキュメントを印刷できます。

3 coda の設定

はじめに

coda は、HP Operations Agent 用の軽量なデータ収集エージェントです。coda は Performance Agent のサブセットで、Performance Agent の通信経路として動作します。すべての設定パラメータは、coda 名前空間および coda.comm 名前空間内でコマンド ovconfchg を使用して設定します。

coda 名前空間

次の表で、coda 名前空間の設定パラメータの一覧を示します。

coda 名前空間の パラメータ	説明	デフォルト値
<code>DISABLE_PROSPECTOR</code>	HP Operations Agent と Performance Agent が共存する環境において、coda データ ソースからのデータ収集を無効にするために使用します。	false
<code>ENABLE_PROSPECTOR</code>	Performance Agent のスタンドアロン環境において、coda データ ソースからのデータ収集を有効にするために使用します。	false
<code>SSL_SECURITY</code>	coda からの安全性の高い通信を有効にする場合に使用します。	NONE
<code>RESPONSE_SIZE_LIMIT</code>	coda によって割り当てられるメモリの最大容量を指定するために使用します。	104857600 (100 メガバイト)

DISABLE_PROSPECTOR

このオプションでは、HP Operations Agent および Performance Agent の両方がインストールされている場合の、coda を介したデータ収集について設定します。デフォルト値は false です。フォーマットは次のようになります。

ovconfchg -namespace coda -set DISABLE_PROSPECTOR <値>

- true: coda は、coda データ ソース用のデータを収集しません。
- false: coda は、coda データ ソース用のデータを収集します。

ENABLE_PROSPECTOR

このオプションでは、Performance Agent のみがインストールされている場合の、coda を介したデータ収集について設定します。デフォルト値は false です。このパラメータは、HP Operations Agent および Performance Agent の両方がインストールされている場合には無視されます。フォーマットは次のようになります。

ovconfchg -namespace coda -set ENABLE_PROSPECTOR < 値 >

- true: coda は、coda データ ソース用のデータを収集します。
- false: coda は、coda データ ソース用のデータを収集しません。



coda の Prospector が有効かどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

ovcodutil -dumpds coda

SSL_SECURITY

このオプションは、coda を介した安全性の高い通信を有効にします。デフォルト値は NONE です。フォーマットは次のようになります。

ovconfchg -namespace coda -set SSL_SECURITY < 値 >

- NONE: coda は、ローカルクライアントまたはリモートクライアントに対して SSL 接続を要求しません。
- REMOTE: coda は、すべてのリモート接続に対して SSL を要求します。
- ALL: coda は、すべての接続 (ローカルおよびリモート) に対して SSL を要求します。



このパラメータは、システムに証明書が存在する場合にのみ使用します。証明書は、HP Operations Agent 8.x がシステムにインストールされている場合にのみインストールされます。

RESPONSE_SIZE_LIMIT

このオプションは、coda デーモンによってクエリ応答に割り当てられるメモリの最大容量を指定します。デフォルト値は、104857600 (100 メガバイト) です。フォーマットは次のようになります。

```
ovconfchg -namespace coda -set RESPONSE_SIZE_LIMIT <値>
```



指定した制限を超えた場合は、次のエラーメッセージが表示されます。

```
Response exceeds memory limits, use several smaller requests
```

coda 通信名前空間 (coda.comm)

次の表で、coda.comm 名前空間の設定パラメータの一覧を示します。

coda.comm 名前空間のパラメータ	説明	デフォルト値
SERVER_PORT	ポートを設定するために使用します。	0
SERVER_BIND_ADDR	サーバー ポートのバインド アドレスを指定するために使用します。	INADDR_ANY
LOG_SERVER_ACCESS	true に設定されている場合、coda はサーバーへのアクセスをすべて記録します。記録される情報には、送信側 IP アドレス、要求された HTTP アドレス、要求された HTTP メソッド、および応答ステータスが含まれます。	false

SERVER_PORT

coda が使用するデフォルト ポートを設定できます。ポートのデフォルト値は 0 です。ポートが 0 に設定されている場合、オペレーティングシステムによって、空いている最初のポート番号が割り当てられます。ovconfchg ツールを使用して、Performance Agent システムでのポート設定を変更します。以下のコマンドを入力します。

```
ovconfchg -namespace coda.comm -set SERVER_PORT <ポート番号>
```

SERVER_BIND_ADDR

このオプションでは、サーバー ポートのバインド アドレスを指定します。この値が localhost に設定されると、coda サーバーへの通信はすべて ovbbccb を通して行われます。フォーマットは次のようになります。

```
ovconfchg -namespace coda.comm -set SERVER_BIND_ADDR <バインドアドレス>
```

LOG_SERVER_ACCESS

このオプションを使用すると、サーバーへのアクセスを有効 / 無効にできます。このオプションが true に設定されている場合、coda はサーバーへのアクセスをすべて記録します。記録される情報には、送信側 IP アドレス、要求された HTTP アドレス、要求された HTTP メソッドおよび応答ステータスが含まれます。通常、この値は変更しません。

```
ovconfchg -namespace coda.comm -set LOG_SERVER_ACCESS <値>
```

単一ポート通信

これは、Performance Agent 4.70 のデフォルトの通信方式です。coda で単一ポート通信を有効にする場合、次のオプションを使用します。

```
ovconfchg -ns coda -set SSL_SECURITY REMOTE/ALL
ovconfchg -ns coda.comm -set SERVER_BIND_ADDR localhost
```

複数ポート通信

coda で複数ポート通信を有効にする場合、次のオプションを使用します。

```
ovconfchg -ns coda.comm -set SERVER_BIND_ADDR ""
```

coda で単一ポート通信と複数ポート通信のどちらが有効かを確認するには2つの方法があります。

- 1 ポートが単一ポート通信または複数ポート通信のどちらで使用されているかを、ローカルホストマシンから確認するには、次のオプションを使用します。

bbcutil -reg

単一ポート通信の場合、以下のように表示されます。

```
BasePath=/Hewlett-Packard/OpenView/Coda/
Protocol=HTTPS
BindAddress=localhost
Port=59814
Authentication=NONE
```

返された値が localhost または 127.0.0.1 の場合は、単一ポート通信です。

複数ポート通信の場合、以下のように表示されます。

```
BasePath=/Hewlett-Packard/OpenView/Coda/
Protocol=HTTPS
BindAddress=ANY
Port=381
Authentication=NONE
```

返された値が localhost 以外の場合は、複数ポート通信です。



bbcutil は、<インストールディレクトリ>/binディレクトリにあります。

- 2 ポートが単一ポート通信または複数ポート通信のどちらで使用されているかを、ローカル ホスト以外のシステムから確認するには、次のオプションを使用します。

```
ovcodautil -n <ホスト名> -ping
```

次に例を示します。

```
ovcodautil -n ovphpt4 -ping
```

単一ポート通信の場合、以下のように表示されます。

```
Ping of 'OvBbcCb' at: 'http://ovphpt4:383/Hewlett-Packard/OpenView/  
BBC/ping' successful
```

```
Ping of 'Coda' at: 'http://ovphpt4:383/Hewlett-Packard/OpenView/  
Coda/' successful
```

複数ポート通信の場合、以下のように表示されます。

```
ovcodautil -n ovphpt4 -ping
```

```
Ping of 'OvBbcCb' at: 'http://ovphpt4:383/Hewlett-Packard/OpenView/  
BBC/ping' successful
```

```
Ping of 'Coda' at: 'http://ovphpt4:62581/Hewlett-Packard/OpenView/  
Coda/' successful
```

複数ポート通信の場合は、2つの出力でポート番号が異なります。



coda クライアントの場合、coda.comm 名前空間のすべてのパラメータは、bbc.http 名前空間に定義されているパラメータより優先されます。

通信ブローカー名前空間 (bbc.cb)

次の表で、bbc.cb 名前空間の設定パラメータの一覧を示します。

bbc.cb 名前空間のパラメータ	説明	デフォルト値
SERVER_PORT	ポートを設定するために使用します。	383
SERVER_BIND_ADDR	サーバー ポートのバインド アドレスを指定するために使用します。	INADDR_ANY

SERVER_PORT

通信ブローカーが使用するデフォルト ポートを設定できます。ポートのデフォルト値は 383 です。ovconfchg ツールを使用して、Performance Agent システムでのポート設定を変更します。フォーマットは次のようになります。

```
ovconfchg -namespace bbc.cb -set SERVER_PORT <ポート番号>
```



通信ブローカー ポート名前空間 (bbc.cb.ports) にすでにポートが定義されている場合は、そのポートがデフォルト ポートとして割り当てられ、SERVER_PORT の値が無効となります。

SERVER_BIND_ADDR

このオプションでは、サーバー ポートのバインド アドレスを指定します。フォーマットは次のようになります。

```
ovconfchg -namespace bbc.cb -set SERVER_BIND_ADDR <バインドアドレス>
```


通信ブローカー ポート名前空間 (bbc.cb.ports)

次の表で、bbc.cb.ports 名前空間の設定パラメータの一覧を示します。

bbc.cb.ports 名前空間 のパラメータ	説明	デフォルト値
PORTS	<p>ネットワーク内で、ホスト上のアプリケーションが通信する可能性があるすべての通信ブローカー用のポートのリストを定義するために使用します。</p> <p>クライアント アプリケーションはこのリストを対象ポートとして使用し、ネットワーク内の通信ブローカーと通信を行います。このポート設定内のエントリとホスト名が一致する場合は、ローカルの通信ブローカー ポートが通信用ポートとして設定されます。</p>	ポートの値のデフォルト設定はありません。

PORTS

この設定パラメータはすべてのノードで同じ値に設定します。特定のホスト上の通信ブローカーのポート番号を変更する場合は、パラメータにホスト名を追加します。

次に例を示します。

```
name.hp.com:8000
```

アスタリスクをワイルドカードとして使用すると、ネットワーク全体を指定できます。

```
*.hp.com:8001
```

ホスト名のリスト内のエントリを区切るには、コンマまたはセミコロンを使用します。

次に例を示します。

```
name.hp.com:8000, *.hp.com:8001
```

この例では、末尾が `hp.com` のホスト名の BBC 通信ブローカーがポート 8001 を使用するよう設定しています。ただし、ホスト名が「name」の場合はポート 8000 を使用します。その他の場合はすべてデフォルトのポート 383 を使用します。

また、IP アドレスとアスタリスク (*) を使用してホストを指定することもできます。

次に例を示します。

```
15.0.0.1:8002, 15.*.*.*:8003
```

ポートを設定するには、次のコマンドを実行します。

```
ovconfchg -namespace bbc.cb.ports -set PORTS <ポート番号>
```

HTTP 名前空間 (bbc.http)

次の表で、bbc.http 名前空間の設定パラメータの一覧を示します。

bbc.http 名前空間の パラメータ	説明	デフォルト値
RESPONSE_TIMEOUT	応答を待機する最大秒数を指定するために使用します。	300
CLIENT_PORT	クライアント要求のバインド ポートを指定します。	0
PROXY	指定したホスト名に使用するプロキシおよびポートを指定します。	プロキシの値のデフォルト設定はありません。

RESPONSE_TIMEOUT

このオプションは、応答を待機する最大秒数を指定するために使用します。デフォルト値は 300 です。フォーマットは次のようになります。

```
ovconfchg -namespace bbc.http -set RESPONSE_TIMEOUT < 値 >
```

CLIENT_PORT

このオプションでは、クライアント要求のバインド ポートを指定します。デフォルト値はポート 0 です。オペレーティングシステムによって、空いている最初のポートが割り当てられます。ローカルホストへの要求の場合、このパラメータは無視されます。



Windows システムでポートを再利用する際、すぐにはポートが開放されないため、このパラメータには大きめの値を設定します。

PROXY

指定したホスト名に使用するプロキシおよびポートを指定します。

フォーマットは次のようになります。

proxy:port+ (a) - (b) ; proxy2:port2+ (a) - (b) ; ... ;

この例で、変数 *a* および変数 *b* は、プロキシに適用するホスト名をコンマまたはセミコロンで区切った形式のリストです。

a: プロキシを使用します

b: プロキシを使用しません

最初に適合したプロキシが選択されます。

また、ホスト名の代わりに IP アドレスを使用できます。たとえば、`15.*.*.*` も、正しい数のピリオドおよびコロンが指定されているため、有効となります。

索引

A

authip ファイル , 46
 フォーマット , 47
 例 , 48

C

Collector サービス
 起動 , 52
 終了 , 52

D

DNS ネーム サーバー , 15
Domain Name System ネーム サーバー , 15

H

HOSTS ファイル
 DNS を使用しない場合の要件 , 15

I

IP アドレス
 変更 , 49
IP アドレスの変更 , 49

M

Microsoft RPC サービス、開始 , 19
mwacmd.exe ユーティリティ , 18, 29, 52, 54

P

Performance Agent
 アンインストール , 24
 起動 , 18, 29, 52
 起動時 , 27
 コマンド ライン インターフェイス , 18, 29, 52
 終了 , 18, 29, 52
 ステータス ファイル , 33
 設定プログラム , 19
 ディスク スペース要件 , 13
 デフォルト収集パラメータ , 50
 ドキュメント一覧 , 55
 トランザクション データの監視 , 51
 ネットワークに関する考慮点 , 15
 リリース ノート , 56

Performance Agent Collector サービス
 起動 , 52
 終了 , 52

Performance Agent サービス
 起動 , 18, 29, 52
 コマンド ラインからの制御 , 18, 29, 52
 終了 , 18, 29, 52
 セキュリティに関する制限 , 28

Performance Agent サービス ウィンドウ , 21

Performance Agent 用のコントロール パネル アプレット , 14, 21

R

RPC サービス、開始 , 19

T

TCP/IP プロトコル
Performance Agent の要件, 15

W

Windows
一時ディレクトリ, 15, 21
インストール ディレクトリ, 21
パス変数, 21, 25

い

一時ディレクトリ, 21
使用, 15
印刷可能なファイル, 55
インストールの手順, 18
インストール要件
ネットワーク, 15
ハードウェア, 11

か

外部データの記録, 49
カスタマイズ
データ収集パラメータ, 50
監視
トランザクションデータ, 51

き

起動
Microsoft RPC サービス, 19
Performance Agent, 18, 27, 29, 52
Performance Agent サービス, 18, 29, 52

く

クライアント認証, 45

こ

コマンド ラインからのサービスの制御, 18, 29, 52

さ

参照
UNIX での PDF ドキュメント, 56
Web で参照, 56

し

自動バックアップ, 54
収集パラメータ, 14, 50
終了
Performance Agent, 18, 29, 52
Performance Agent サービス, 18, 29, 52
インストール前にプロセスを終了, 18

す

[スタート] の [プログラム] メニュー、RPM
ツール フォルダ, 21
ステータス ファイル, 33
coda.txt, 33
status.alarmgen, 33
status.mi, 33
status.perfalarm, 33
status.perflbd, 33
status.rep_server, 33
status.scope, 33
status.ttd, 33
ストライプ処理されたディスク、データの収集, 21

せ

セキュリティ要件
アンインストールについて, 18, 24
サービス用, 28
設定プログラム, 19

て

- ディスク スペース要件 , 13
- ディレクトリのサンプル
README, 34
- データ収集パラメータ , 50
- データ ソース、PerfView 追加
データ ソースの追加 , 49
- データ ソース統合
PerfView でデータを表示 , 49
PerfView のデータに関するアラーム , 49
- データ ディレクトリ , 14
- デフォルト
収集パラメータ , 50

と

- ドキュメント
Performance Agent ドキュメント一覧 , 55
UNIX での PDF ファイルの参照 , 56
Web に掲載されているドキュメント , 56
- ドキュメントの印刷 , 55
- トランザクション追跡 , 51

ね

- ネットワークに関する考慮点 , 15

は

- ハードウェア要件 , 11
- パス変数 , 25
Performance Agent による変更 , 21
- バックアップ、自動 , 54
- バックアップに関する考慮点 , 53
- バッチ ファイル , 18, 29, 52, 54
- パフォーマンス データ
記憶領域要件 , 13
収集 , 50

- パフォーマンス データの記録 , 14
デフォルト パラメータ , 50

ふ

- ファイアウォール
Performance Agent 通信設定の概要 , 36
ファイアウォールを介した通信 , 35, 42
複数の IP アドレスを持つシステム , 41
- ファイル
authip, 46
status.scope, 33

め

- メトリックの定義、印刷 , 55

り

- リモート プロシージャ コール サービス、開始
, 19
- リリース ノート , 56

ろ

- ログ ファイル
アンインストール プログラムでは削除さ
れない , 25
管理 , 14, 50
最大サイズ , 14
相違 , 54
ディスク容量の要件 , 14

